

(報告)

『韓国語学習の「おやつ」 - 10分で知る韓国の社会と文化 -』制作報告

- 制作背景・構成・使用法を中心に -

松 崎 真 日
丁 仁 京
安 藤 純 子
趙 賢 眞

1. はじめに

福岡大学では、共通教育で実施する朝鮮語の一部科目¹において、2019年度から韓国の社会と文化に関する内容をシラバスに明記する形で実施してきた。それ以前、つまり2018年度まではどうであったかという、朝鮮語の授業においては、朝鮮語の教授のみをシラバスに記載し、社会や文化については担当教員の裁量で扱っていた。このような裁量による取り扱いにおいても一定の教育効果は見られたが、クラス間での学習内容の違いや、取り扱う話題に偏りが生じるなど、担当教員の個性に依存するという問題点もあった。そこで、2019年度からは、韓国の社会と文化に関する統一教科書を指定することで、韓国語のみならず、韓国の社会と文化についても全受講生が一定の水準での学習ができるよう変更を加えた。このことにより統一シラバスに、韓国の社会と文化についての学習を行うことが明記されるようになった。このことは本学の朝鮮語科目の教育内容として、言語に加え、社会と文化をも位置づけることになったという点で大きな一歩を踏み出したものといえよう。その後、2021年度には、本学の教員の手による『韓国語学習の「おやつ」²が発刊され、この教科書に基づいた授業が展開されることで、より体系的な教育が可能になった。すでに言語については『ハングルマダン』³により福岡大学における教育内容や方法についての枠組みを示していたが、社会と文化についても枠組みを確立することができたといえる。

本稿では、2021年度から本学の共通教育朝鮮語科目に導入されることとなった『韓国語学習の「おやつ」』作成の背景、構成、使用法などについて報告する。

2. 本書制作の背景

いわゆる第二外国語としての朝鮮語科目は、本学においては共通教育の第二外国語科目として開講されている。第二外国語科目という科目の性格上、朝鮮語の習得が授業の最大の目的となる。もちろん、言語は社会や文化の中で使用されており、言語を教える中で社会や文化をも取り扱っていくことは一般的である。また異文化や他者の理解という面においても、取り扱うことの意義は認められよう。

とはいえ、朝鮮語の授業の柱は語学の習得であるので、その教科書においては、当然のことながら語学が中心となるのが普通である。一方で、社会や文化に関してはコラムや参考情報としての取り扱いにとどまることが多く、体系的、網羅的に取り扱っている語学の教科書はほとんどないのが現状である。

本学においては、語学の教科書として『ハングルマダン』⁴を採択し、語学教育の指針としてきた。年度により変動はあるが、入門レベルに相当するクラス（朝鮮語Ⅰ、朝鮮語ⅠA、朝鮮語ⅠB）がおよそ50クラス、また1段階高いレベルのクラス（朝鮮語Ⅱ、朝鮮語ⅡA、朝鮮語ⅡB）が17クラスあり、計67クラスとなる。これら多数のクラスの運営において、クラスごとの教育内容のばらつきを抑え、教育内容を一定範囲また一定水準に保つためには、統一の教科書とシラバスが必要となってくる。統一的な進度で、統一的な内容を、取り扱うことで、2年目以降の学習への円滑な接続が可能となるだけでなく、教育内容の改善を検討する際にもクラスの垣根を越えて、全体として対応することが可能となってくる。

¹ 主として1年次の学生が受講する入門クラスである朝鮮語ⅠA、朝鮮語ⅠB、朝鮮語Ⅰにおいて導入を開始した。

² 2021年1月に朝日出版社から刊行。本報告の著者4名による共著である。

³ 初版は2017年1月に、改訂版は2020年1月に、いずれも朝日出版社より刊行。

⁴ 2015年度より前身となる『韓国語教本』を使用し、2017年から『韓国語教本 ハングルマダン』を、2020年度からは『韓国語教本 ハングルマダン 改訂版』を使用している。版を重ねるごとに内容を改良してきた。

さて、本学で使用している『ハングルマダグ』は、朝鮮語学習のための教科書であるため、ところどころに社会や文化に関するコラムがあるものの、あくまで中心は語学であり、社会や文化の学習においては、自ずと限界があった。

2018年度以前は、社会や文化については各授業担当教員の裁量により行うという形態をとっていた。他大学も含め、語学の授業においては一般的な形態であると推察されるが、この形態による授業運営上の問題も確認された。それらの問題点は次の3点に集約できる。

- (ア) 授業準備の非効率性
- (イ) 担当教員による授業内容の違い
- (ウ) 授業手順

1点目は、授業準備の非効率性である。教科書を指定せずに、社会・文化を扱う授業を行う場合、各教員は、同一科目を担当しているにもかかわらず、それぞれに授業準備を行う必要が生じる。何を取り扱うかの検討から始まり、適切な資料の収集や探索、学生への見せ方など、各担当教員が授業準備に多大な時間を費やすことになる。一例として、韓国の教育制度について概要を紹介しようとした場合、新聞や雑誌の記事などから適切なものを探し出し、受講生への配布資料として加工・印刷することが考えられる。しかしながら記事は概要を紹介するためのものというより、特定の問題の解説であったり、記者独自の観点から執筆されているといった理由から、授業で使用するにふさわしいものを選ぶのには時間がかかる場合がある。また配布のための印刷にも一定の時間が費やされる。

教員が授業の準備に充てられる時間は有限であるので、こういった準備に時間を費やすほど、授業準備として当該テーマに関しての調査時間が持ちにくくなるだけでなく、授業の柱である語学の授業準備に充てる時間が減少する場合も生じてくる。

また、逆の場合もありうる。語学の授業に十分な時間をかけて準備をした結果、社会・文化に関する準備に十分な時間が割けなくなる場合がある。

このように、同一科目に多数のクラスがある場合、各教員に対し指針を示さず、教員の裁量に任せることは、専門分野の適合性や、類似した授業の経験が豊富であるといった一部の例外はあるにせよ、全体としては教育の質を担保することが難しくなるという問題点がある。

このような問題点を解決するために、教科書の使用は意義が認められる。内容が十分に検討された教科書であるならば、資料の選別や、基本的な説明は教科書に依拠することが可能になるので、教員は当該内容についてのアップデートや、教科書で不足している部分の補充に専念することができる。教科書を土台にプラスアルファの

準備を行うことで、質の高い授業を効率よく準備することが可能になる。

多数のクラスを、多数の教員が担当する場合においては、一定の水準を保って、教育を展開することが重要であろう。そのためには、効率的な授業準備が可能になるよう指針を示すことが大切になってくる。それを行わず、教員の裁量にのみ依存すると、その非効率性ゆえに、全体としては提供する教育の質が切り下がる方向に進みやすいという問題点があるといえる。

2点目は、担当教員による授業内容の違いである。20名程度の教員が担当している本学の朝鮮語の授業担当教員の専門分野は多彩である。朝鮮語学を専門とする教員のみならず、文学、歴史、教育、政治など多様な専門分野を持つ教員が教育に当たっている。いずれの教員も熱心に取り組んでいるが、各教員はバックグラウンドや興味・関心が違っているため、とりわけ教科書が指定されていない社会や文化領域においては、担当クラスにより教育内容の違いが生じるという現象が起きる。ある教員は、日々のニュースを中心に扱う一方、別の教員は観光情報を中心に扱い、また別の教員は歴史を中心に紹介するといった違いが出てくる。朝鮮語という同じ科目を受講しても、特に社会・文化に関してはクラスにより学習内容の違いが大きいということがあった。

他方で、本科目の目標に沿った学習内容、また最低限知っておくべき知識というものもある。例えば、朝鮮半島の地理的特徴や、衣食住、社会制度などは、隣国の人々がどのような社会に暮らし、どのような文化を持っているかを知る上で基本になる知識といえる。こういった基本的な内容に加え、受講者の興味や関心にも配慮した学習項目を選定しておくことは、担当教員の専門分野の違いによらず学習内容を担保するという点で意義が認められる。

教員の裁量による授業は、受講者が専門分野の話題に触れることができるなどのメリットもあるが、共通教育朝鮮語として行う隣国の社会や文化の学習であることを踏まえるならば、基礎となる知識を学ぶことが先であり、専門分野についてはその基礎に積み上げる形で扱うことが望ましい。そのためにも、授業の指針としての教科書の使用は一定の内容を確保するうえで重要になるといえる。

3点目は、授業手順である。1点目、2点目ともかわるが、社会・文化の取り扱いを全面的に教員の裁量に依存すると、当然ながら授業手順も教員によってまちまちということになる。社会・文化領域を、学生の興味・関心を高めることを狙いとして授業の冒頭で扱う教員もいれば、授業の時間調整として授業の終盤に利用しようとする教員もいる。また、学期の前半から中盤にかけて

は語学教育に集中し、学期末に時間をとって一度に文化の授業を実施する例もあった。このようにクラスにより授業手順が異なることは、単に社会・文化領域のみの問題ではなく、朝鮮語授業の構成の問題でもある。毎回の授業は、語学を中心としつつも、社会や文化に関する知識をもあわせて提供していこうという立場から、適切な授業指針になりうる教科書の使用が必要になってきた。

全面的に教員の裁量に任せた授業運営では、以上のような問題点が存在しており、これを解決するために、本学共通教育朝鮮語では2019年度より、社会と文化に関する教科書の導入を行うこととした。課題が明らかであったため、まずは教科書の導入を優先し、市販の教科書の中から内容、水準、価格等の観点から検討を加え、『ソウルスタイル 韓国のそこが知りたい55』⁵を採用した。また並行して、本学で使用するための新たな教科書制作の準備に入った。

以上が、本書『韓国語学習の「おやつ」 - 10分で知る韓国の社会と文化-』制作の背景である。

3. 本書のねらい

本書は、第二外国語科目として朝鮮語科目において、韓国の社会および文化を取り扱うための教科書として制作した。先述した通り、朝鮮語の授業においては語学の学習こそが最大の柱であるが、同時に社会や文化について学ぶことも異文化や他者理解の観点から意義が認められる。このような立場から、本書は朝鮮語授業の副教材としての使用を前提に、次の3点をねらいとして制作した。

- ①韓国に関する基本的な知識に加え学習者の興味関心に沿った項目を学習できること
- ②各項目は簡潔にまとめ、毎回10分程度で学習が完結できること
- ③イラストや質問を設定することで、学習者の想像力と既存知識を活性化すること

第1点目は、学習項目の選定に関するねらいである。本書では、韓国の地理や社会、韓国の生活、韓国の人々などの基本的事項を取り扱うこととした。1年間の朝鮮語学習に相応しい知識、例えば韓国の主要都市や宗教の状況、代表的な食べ物等についての基本的知識を得られるよう項目を設定した。さらに学習者ニーズにも配慮することで、本書で学ぶ18~19歳を中心とした大学生の興味・関心に触れる項目選定を心がけた。そのために、福岡大学で共通教育朝鮮語を学ぶ500名強の学生を対象に

アンケート調査を実施し、学習者ニーズの把握を行った。このアンケート結果から大学生が関心を持っている項目を選定し、学習者ニーズに応えながら、基本的知識を得られる項目を最終選定した。

第2点目は、短時間で学習可能な教材にすることである。視覚資料としてイラストを活用することで情報をわかりやすく提示するとともに、解説文については限られた時間の中で読めるよう要点を1ページでまとめた。各項目について、イラストと文章を組み合わせることで、短時間で学習できるよう編集した。

第3点目は、学習者が授業に能動的に参加できるようにすることである。各課は「導入→質問→説明→補足」の順で構成してあるが、特に導入においてはイラストを活用することで関連知識や既存知識を活性化できるよう工夫してある。イラストは動作や表情などの文字では表しにくいことを見せることができる。加えて、文字とは違い瞬時に読み取ることが可能である。本書ではイラストの下方に質問文を置くことで、その後の解説文を読むための動機づけとなるようにした。このように、本書は単なる解説文を収録したものではなく、授業を活性化させる工夫が盛り込まれた教科書であるといえる。

以上、3つのねらいについて述べたが、本書は韓国の社会と文化について、基本的な事項を中心に学生の関心に配慮した項目構成をとること、またそれらの項目は短時間で学べるよう簡潔に提示すること、さらに学生の能動的な参加を促す構成をとることを狙いとして制作した。

4. 本書の構成

本書は、韓国の社会と文化に関して50の項目を取り上げ、各項目につき2ページで学べるよう構成している。最初に、取り上げた項目を示すと次のとおりである。

本書は①~⑧のテーマのもと、50の項目を配列している。①~③では韓国に関する基本的知識を扱っている。また、④観光、⑤食文化、⑥韓国の人々に関する項目が比較的手厚くなっているが、これは学習者ニーズを取り入れた結果である。ただし、本書は教科書であり、観光ガイドブックではないので、説明においては社会や文化に関する情報を取り入れながら記述するように努めた。一例として、韓国を代表するショッピング名所である明洞についての記述ではショッピングについての記述に加え、植民地時代の建物が残っていることや、不動産価格が韓国で最も高いことなど、観光案内にとどまらない情

⁵ 朴大王 (2013)、白帝社

表1 『韓国語学習の「おやつ」 - 10分で知る韓国の社会と文化 -』の構成

①韓国の地理		⑤韓国の食文化	
1	地理 (지리)	26	キムチ (김치)
2	主要都市 (주요 도시)	27	粉食 (분식)
3	天候と自然 (날씨와 자연)	28	家庭料理 (가정요리)
②韓国の社会		29	韓定食 (한정식)
4	通貨 (통화)	30	中華料理 (중국요리)
5	政治 (정치)	31	日本料理 (일본요리)
6	兵役 (병역)	32	酒 (술)
7	交通 (교통)	33	出前 (배달)
③韓国の生活		34	食器 (식기)
8	住居 (주거)	⑥韓国人々	
9	オンドル (온돌)	35	人間関係 (인간 관계)
10	韓服 (한복)	36	マナー (매너)
11	チムジルバン (찜질방)	37	スキンシップ (스킨십)
12	支払い (계산)	38	恋愛 (연애)
13	キャッシュレス社会 (현금 없는 사회)	39	整形 (성형)
14	情報技術 (정보 기술)	40	美容 (미용)
15	宗教 (종교)	41	韓方 (한방)
16	墓 (묘)	42	占い (점)
④韓国の観光		⑦韓国の若者	
17	ソウル (서울)	43	課外学習 (과외)
18	明洞 (명동)	44	受験 (수험)
19	弘大 (홍대)	45	キャンパスライフ (캠퍼스 라이프)
20	景福宮と周辺 (경복궁과 주변)	46	出会い (만남)
21	市場 (시장)	47	スベック (스펙)
22	漢江公園 (한강 공원)	⑧魅力的な韓国の文化	
23	釜山 (부산)	48	韓流ブーム (한류 붐)
24	濟州島 (제주도)	49	韓国映画 (한국 영화)
25	世界遺産 (세계유산)	50	伝統工芸 (전통 공예)

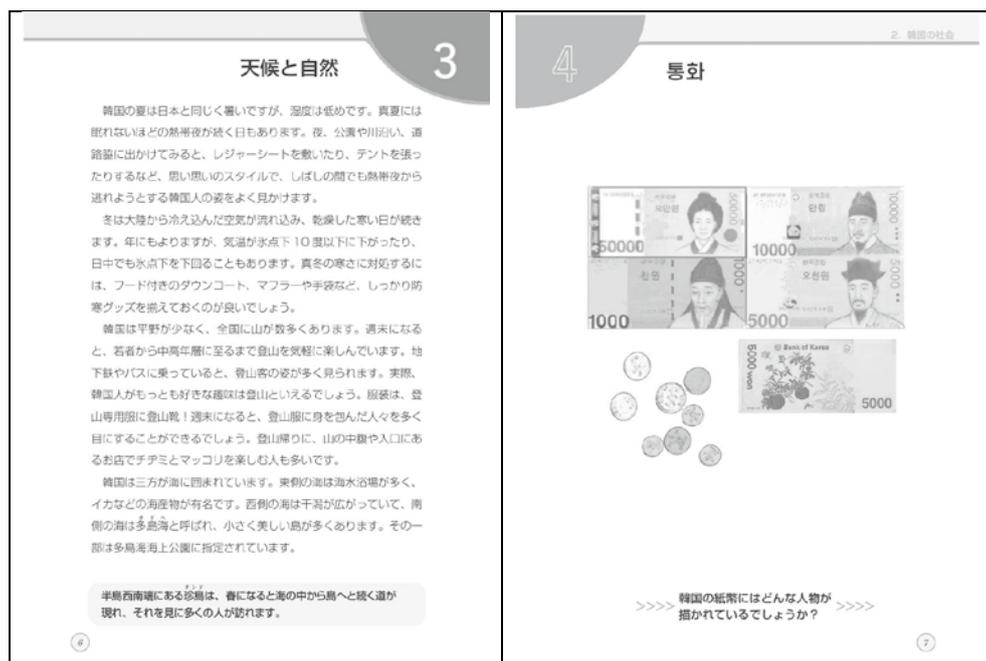


図1 「通貨」の単元構成 (右ページ)

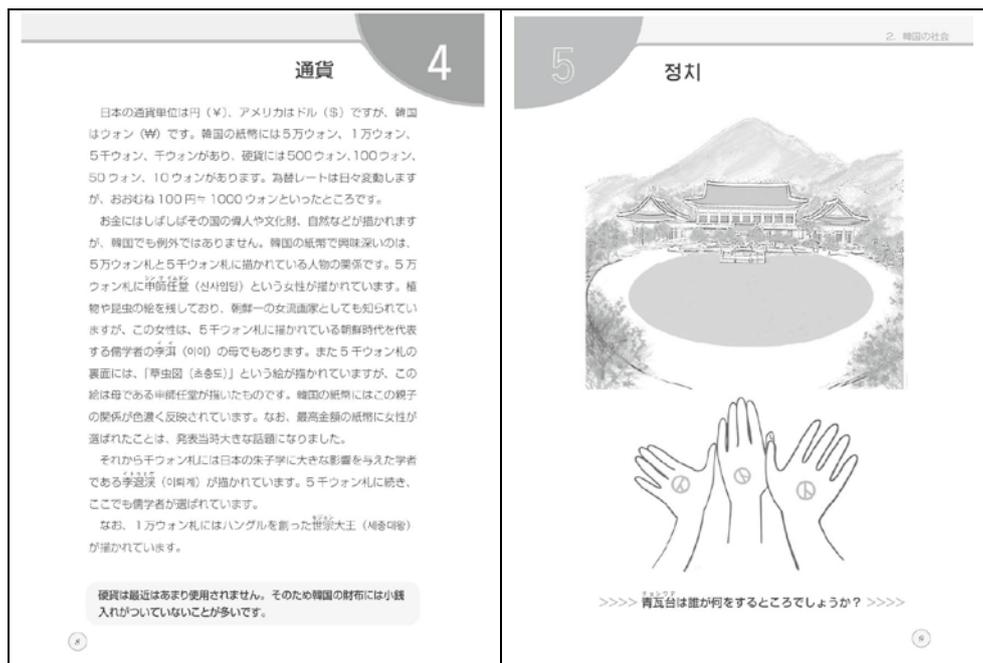


図2 「通貨」の単元構成（左ページ）

報も提供している。

次に、各項目の提示方法についてみてみたい。各項目は2ページで完結しているが、イラストと質問がある1ページ目は見開きの右ページにあり、解説文と補足はページをめくらない限り見ることができないように工夫してある。つまり、テーマとイラスト、および質問を見ているときには、解説文や補足は視野に入らない状態になっている。これは学生が想像力を十分に働かせた後に、解説文を読むことができるよう配慮したものである。

図1・2は4単元の「通貨」の配置を示すものである。

各項目は、最初の見開きの右ページと、次の見開きの左ページでひとつの単元を構成している。第4単元でいえば、7ページと8ページで一つの単元ということになる。

解説文は、平易な日本語で記述している。また、前ページの質問に対する答えが得られるものとなっているため、学習者は前ページの質問に対する答えや、思案した内容が合っているかを確認することができるようになっている。さらに、解説文の下には「補足」を載せ、周辺の情報の提供を行っている。なお、人名や地名、作品名など朝鮮語での読み方を知っておくべき固有名詞についてはハングル表記を併記し、学習に役立つよう工夫した。

以上のように各単元を構成することで、各回の授業では「テーマの確認→イラストの確認→質問をめぐる思案→解説文を通じての理解→補足を通じた周辺情報の獲得」の手順で円滑に学習が進むよう構成している。特に、イラストは単なる挿絵ではなく、教材としての役割を明

確に持たせていることが特徴である。学習者の思考を支援し、その後に関し解説文を能動的に読んでいけるよう配慮した。

このように、本書は授業の進行手順に沿って制作してある。単なる解説文を集めたものではなく、学生の学習意欲を促進させながら学ぶことができるようにした教科書だといえる。

また、本書が示す手順に沿って授業を進めるならば、教員は補足説明や質疑により一層注力することが可能になる。加えて授業準備においても、例えば上記の「通貨」のテーマであれば、実物貨幣の準備のような全教員がそれぞれ行うには非効率的な作業からも解放される。資料の準備時間を節約することで生じた時間を最新情報のアップデート、語学の授業準備、フィードバックなどに割くことができるようになる。

5. 本書の制作と使用についての実例紹介

ここでは、本書の使用の実例について、3名の教員から報告する。

5-1 授業実践報告（丁仁京）

2021年度に、丁が担当したクラスは、「朝鮮語 I A CF」(56名)と「朝鮮語 I B TL」(31名)、「朝鮮語 I B CC4-6・SE」(48名)の3つのクラスである。2021年度は、新型コロナウイルス(COVID-19)の影響により、5月からは遠隔授業を実施している。ここでは、Webexによるリアルタイム授業での本書の進め方を報告する。進め方としては、前述したように「テーマの確認→イラスト

トの確認→質問をめぐる思案→解説文を通じての理解→補足を通じた周辺情報の獲得」の手順で行っている。

◎「導入」から「ターゲット内容の確認と補足説明」までの流れ

まず、本時授業で扱う内容のPDF資料を画面共有で提示する。学生は各自の教科書か、教員が提示した資料を見る。「導入」として1ページ目を提示し、テーマとイラストを確認し、そこから質問について熟考し答えをチャットに書き、提出する。その後、「ターゲット内容の確認と補足説明」として、2ページ目の解説文に移り、数名の学生に音読させる。本書の各項目は600字程度の短い文章であるが、毎回数名の学生に音読させ、学期内に全員が読むタスクをこなす授業に参加できるよう心がけている。解説文を読んだ後に、質問の答えの確認と解説文の内容を理解しているか確認作業と、補足説明を加え周辺情報をも獲得できるようにしている。また、補足説明の「発展」として、質問を受け説明を加えている。「発展」においては、学生が疑問や関心を持つ分野を再認識することもあり、教員として非常に興味深い。

本書は、前述したように基本的に各項目の内容と質問の答えは「イラスト」で連想できるようになっているが、補足説明を加える際に必要に応じて、映像資料を見せるなどの工夫をしている。

◎「교통 (交通)」:「朝鮮語 I A CF」クラスの実践例

最初に、テーマの確認とイラストを簡単に説明し、質問「ソウルから釜山までの移動時間はどれくらいでしょうか?」を投げかけ、答えをチャットに提出させた後、解説文を段落ごとに3名の学生に読ませ、質問の答えを確認した。その後、「交通機関の料金の安さ、KTX (韓国高速鉄道) の特徴と地下鉄の便利さ、ソウル高速ターミナルの巨大さ」などの解説を加えた。さらに周辺情報として、ソウル駅の改札口、地下鉄の座席 (優先席・妊産婦配慮席、ステンレスの座席等)、色別でわかりやすいバスの種類、T-Moneyカードの多様化等を、PPTで

提示しながら説明し、最後にソウル高速ターミナル (江南高速ターミナルとも言う) の映像を見せた (図3参照)。

上記の授業中、チャットに寄せられた質問の一部を以下に示す。

- ・韓国には、一日乗車券はありますか?
- ・特急や急行などはありますか?
- ・モノレールや路面電車は通っていますか?
- ・韓国で一番使いやすいと思う交通手段は何だと感じますか?
- ・高速道路も日本と比べて安いんですか?
- ・韓国の車は右車線というのは本当ですか?
- ・韓国はバス・タクシー等運転が荒いと聞きますが本当ですか?
- ・ソウルからチェジュまでは飛行機や船でどのくらいかかりますか?

本授業ではチャットから27件の質問を受け、すべてについての補足説明はできなかった。本時のように質問が多く寄せられた場合は、次回の授業において質問のポイントをまとめ、フィードバックを行っている。このクラスは56名が受講しており、初回授業時はほとんど質問がなかったが、回数を重ねることに積極的に質問が出されている。これは韓国の社会や文化について興味・関心が授業を重ねるごとに高まっていることも一因と思われる。また、オンライン授業ならではのメリットとして、直接声を出さなくてもチャットを通じて負担なく質問ができるという理由も考えられる。前期最後の授業時に、本書で学んだことについての感想を簡単にチャットを通じて提出させた。その一部を以下に示す。

- ・コロナが落ち着いたら韓国に行ってみたい。
- ・韓国に行ったらオンドルを体験してみたい。
- ・チムジルバンに行って、ヤンモリをして、燻製ゆで卵とシッケを飲んでみたい。

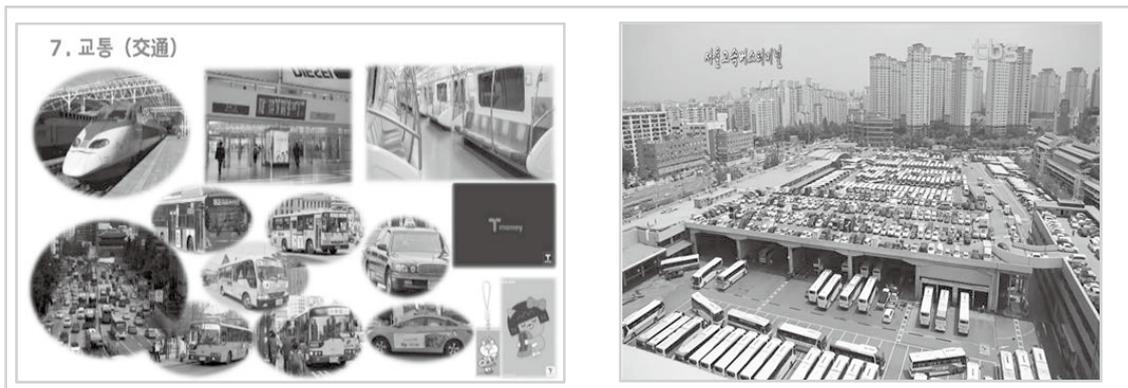


図3 「交通」の補足資料 (右:映像資料 <https://www.youtube.com/watch?v=E0X1NPqS0Ms&t=272s>)

- ・ホンデに行って、路上ライブを見たり、韓国の若者文化を感じてみたい。
- ・授業を受けて、自分でもネットで調べるようになった。
- ・ソウルに行って地下鉄やバスに乗ってみたい。
- ・アイドルのT-Moneyカードが欲しいと思った。
- ・韓国の社会や文化を学んで韓国や韓国語に興味を持つようになった。
- ・韓服を着て、王宮を巡ってみたい。
- ・釜山に行って、標準語と方言の違いを感じてみたい。
- ・釜山港がコンテナ貨物のハブ港としてトップクラスにあることを知り勉強になった。

本書を通じて、学習者の韓国社会や文化への理解が促進され、モチベーションが高まる効果があったと考えられる。また、韓国の社会や文化を学び日本との比較を通して、学習者の日韓相互理解が深まることが期待できる。前期の授業を通して、韓国や朝鮮語に興味を持った学習者が多かったことから、文化と言語を共に学ぶことにより得られる相乗効果が発揮されたと考えられる。

5-2 執筆過程と本書の使用法（安藤純子）

本書はタイトルに「おやつ」とあるように、韓国語を学習する際に、ちょっと休憩気分で読めるような内容にすることを念頭に置いて執筆した書である。とはいえ、韓国語初級学習者に、語学だけではなく韓国の社会や文化にも関心を持ってもらうことが目的であるので、単なる「読み物」ではなく、ある程度の知識を得られるような内容にする必要があった。最終的には執筆者全員で何度も読み合わせ、修正を繰り返して書き上げてはいるのだが、第一稿は各自の専門、経験、関心分野を分担して執筆した。特に自らの専門分野となると「あれもこれも知っておいてもらいたい」という欲が出てしまい、内容も多くなり、言葉遣いも専門的になりがちになった。第一稿執筆時、その欲を捨てるのが最も苦労した点であった。しかし、専門分野が異なる執筆者が集まり検討することで、余計な欲をそぎとり、初心者が「なるほど、へえ、そうなんだ」と関心を持ちながら読むことができる内容にまとめることができたと思う。

執筆している時には感じなかったが、実際に使用する立場にたってみると、まず、各項目が最初の見開き右ページと次の見開き左ページで一つの単元を構成している点が非常によいと感じた。最初の見開き右ページ下段には、次ページの内容につながる簡単な質問を投げかけているので、学習者は中身を読む前に「考える」ことが要求される。特にネットが当たり前にある時代に生まれ育った学習者にとって、分からないことは「考える」以前に調べてしまうことが多い。もちろん、調べることも学習の1つではあるのだが、調べる以前に自分の頭で考えてみ

るというのは、どんな学習にとっても重要であることは言うまでもない。たとえ考えて答えが間違っていたとしても、それはそれで逆に記憶に残るであろうし、更なる知識を求めて調べるといった一歩上の学習につながっていくのではないだろうか。

実際の授業では、質問を投げかけて少し考えさせた後、次ページに移って学習者に読んでもらい、少し説明を加えた方がより分かりやすい場合には、写真や動画などで補足説明をしている。内容が1ページ以内に収まっているせいか、学習者たちは飽きることなく集中して読み、聞いており、時には質問も出る。一方、教員側にとっても、授業の最初に本書を使用することで韓国への興味を引き出し、それを韓国語学習への興味関心につなげることができているように感じる。本書を通じて、学習者たちが韓国語だけではなく、韓国への興味関心を広げてくれることを期待しているし、それができる内容の書になったと自負している。

5-3 本書の基本的な使用法と発展的な使用法（趙賢眞）

今年度の前期から第二外国語として、朝鮮語 I A・I Bを選択している福岡大学の全学部学生たちを対象にし、本書を用いて韓国の社会と文化に関する授業を行っている。本書では、韓国の地理と韓国の社会、韓国の生活、韓国の観光、韓国の食文化、韓国の人々、韓国の若者、魅力的な韓国の文化という8つのカテゴリーに50のトピックを配置し、さまざまな観点から韓国の現代事情について学習することが可能である。

授業では、ブレ活動として学生たちに各トピックのイラストと質問を見て熟考してもらった上で、各トピックの文章を読んでもらっている。その後、それぞれのテーマに関わる写真や動画を加えて簡単に補足説明を行う。最後に2行ほどの豆知識コーナーで各トピックの本文で扱えなかった内容について解説している。このような学習プロセスを通じて、学生たちは韓国の社会と文化に関する基礎的な知識を習得し、今日の韓国事情を理解することができる。

本書は、韓国の社会と文化に関する講義科目でも活用することができるであろう。各トピックの内容をベースにしつつ、補足説明を必要とする事項については、スライドやプリント、映像（YouTube）など、学生たちに補足説明を盛り込んだ補助資料を提示すると、韓国の社会と文化に対する理解をより深めることができる。講義形式の授業においては、教員が学生たちに説明を続ける一方的な情報伝達になりがちであるが、グループで与えられたテーマについて議論し結論を出すグループディスカッションを取り入れると、学生たちは主体的に自身の意見を伝える能力を伸ばすことができ、また他者と意見交換する中で韓国の文化と社会をより深く理解できるよ

うになる。このようなディスカッション演習を通じて、学習者は日韓両国文化の類似点と相違点を比較分析し、知識や思考の幅が広く物事を多面的に捉える力を養うことができる。

グローバル社会で活躍する人材には、語学力のみならず、異文化コミュニケーションの能力も必要であると言われている。本書で学習することにより、韓国の地理や社会、生活、食文化など、韓国の最新事情についてさまざまな側面から幅広くかつ総合的に理解し、異文化への理解力を高めてコミュニケーションスキルを習得できるようになる。また、グローバルな視野に立った国際教養と専門知識を持ち、多角的・論理的に考えて自分の意見を積極的に発信することができる。

6. おわりに

本稿では、『韓国語学習の「おやつ」 -10分で知る韓国の社会と文化-』について、制作の背景、構成、使用方法について報告を行った。外国語科目において、社会・文化の学習を効果的に取り入れ、かつ毎回の授業をより一層魅力的なものとし、また同時に多数のクラスの教育の質を担保するために、著者が行った工夫について述べてきた。

至らない点も多いであろうが、4名の著者が時間をかけて議論し、制作したものである。本書を通じて、言語と社会・文化を統合する新たな朝鮮語教育が展開することを期待している。